

【2026 ワールドカップ・タシケント大会 3日目】

大会最終日となる3日目は、2連戦による疲労が見られる中でも、これまでの試合で得られた課題と成果を踏まえ、より高い完成度を目指して試技に臨んだ。

【団体】

《ボール5》 4位

得点：24.900 (DB 4.80/DA 6.60 /A 7.25/ E 6.25)

日本は種目別決勝においてボール5種目のみに出場した。演技は序盤から中盤にかけて移動も少なく、各要素において価値を確実に取り切ることができ、安定した流れで進めることができた点は成果である。

一方で、中盤以降に課題が見られた。技術や体力、精神面など複合的な要因による力みから投げが上方方向に偏り、CRにおける土台との距離感やメンバー間のタイミングが崩れ、価値を取りきれない場面が生じた。さらに終盤の複数投げでは大きく左に逸れて落下が発生し、その直後に予定していたCCを実施できず、結果として3つ目のCCが未実施となるなど、不用意な減点につながった。

その後も流れを立て直すことができず、ラストのリスクにおいても落下が発生し、最終的に0.7点差でメダルを逃す結果となった。

今回の要因としては、体力面の不足に加え、投げ技におけるコントロール力の課題が挙げられる。いずれも日頃の練習から継続的に改善していく必要があり、本大会を通じて、テクニク面・フィジカル面・メンタル面の各側面において見直すべき課題が明確となった。

一方で、本遠征を通じてトライアンドエラーを重ねる中で、着実に経験と学びを積み重ねている手応えも得られている。今後は、これらの課題を整理し、精度と安定性を高めながら、持ち点を確実に得点へとつなげていくことが重要である。

次戦となるバクー大会に向けては、本大会の反省を活かし、着実さと挑戦する姿勢の両立を図りながら臨んでいきたい。

〈出場選手〉

田口久乃

西本愛実

花村夏実

田中友菜

眞鍋凜

本大会を通じて、昨シーズンと比較し、個人・団体ともに演技全体のクオリティが大きく向上していることが感じられた。各国ともに単に高難度を実施するだけでなく、ルールブックで定められた形を正確に実施することに重点が置かれており、得点を安定して積み重ねるための演技構成および実施精度の向上が顕著に見られた。

特に、フェットターンにおいては、膝の位置やパッセの形が明確に保たれており、回転数だけでなくフォームの正確性が厳しく評価されている傾向が見られる。回転数の積み重ねに加え、正確なフォームで難度を成立させることが、今年度においてはより重要視されていることが明確となった。

また、ロシアおよびベラルーシの復帰により、後屈系の高難度を高い精度で実施する選手が増えたことで、開脚や後屈の誤差がより顕在化する状況となっている。これにより、難度そのものの高さに加え、いかに減点の少ない「クリアな実施」を行えるかが、順位を左右する重要な要素となっている。

日本チームにおいても、難度の向上に加え、減点を最小限に抑えた正確な実施の徹底が不可欠であり、今後は技術の精度向上とともに、安定して得点を積み重ねる演技の構築が求められる。

Live results link:

<https://www.sportvokrug.com/sports/rg/event/14878/results/>